



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.261
2025.6.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

第3回 ◆ 馬渡埴輪製作遺跡の調査と全容の解明(1) ◆

馬渡埴輪製作遺跡の第1次(A地区)発掘調査は、1965(昭和40)年8月5日から始められた。調査が始まる前の地元新聞には、県史編さん委員の川上博義の談話として、「三地区(A・B・C地区)のうちの一面、谷の奥まったところであり、①わき水が豊富で、良質の粘土層に恵まれ、ハニワを焼く最適な地だったこと、②谷に沿って入ってくる自然の通風を利用したゆるい勾配の登り窯とみられることなど、すぐれた立地条件が特筆される」と記される。

調査団構成は、「明治大学大塚初重博士ら明大考古学研究室、県社会教育課、勝田市教委関係者とし、大塚らはこのカマ跡が、そっくり埋もれたまま残っているものと期待がかけられる」と続く。

川上博義は、1955(昭和30)年、玉造町三味塚古墳の発掘調査を実施した県社会教育課の調査担当者で、大塚を支え奮闘し、実質二人で調査を担っている。

さらに記事の後半では、「勝田市、東海村地方の古墳群から出土するハニワは、人物・動物・円筒ハニワなど種類も多く、そのいずれも、焼きの技術もすぐれ、学界でも那珂川流域のハニワとしても注目を集めているものだが、今回のハニワ窯跡はちょうど両地方の中心部にあたるこの窯で作られたハニワかどうか埴輪の窯供給源とその分布圏を知るためにとりわけ貴重なデータが得られるのではないかと期待されている。なお、本県のハニワ窯跡は、常陸太田市の太田山に見られる程度で他は僅かに痕跡をとどめるのみとなっており、発掘が進むにつれ、当時のまま残存していることになれば、県下では最も貴重な遺跡にあげられるという。」と結ばれている。

大塚は、川上と入念な打ち合わせを行い、馬渡埴輪製作遺跡の重要性について話し合い、遺跡の重要性についての記事を依頼したのではなかろうか。

さらに勝田市教委、県社会教育課、調査団一丸となり遺跡の解明を行うと強調している。

遺跡の調査は、当初3回の予定で勝田市と明治大学の共同調査で計画されたが、目的達成時は、A地点3回、B地点1回(隣接する鉾の宮古墳群の調査実施を含む)、C地点3回と遺構の拡がりによる大幅な調査の拡大をしている。昭和41年3月と8月には、茨城県から2回の補助金が支出されている。

遺跡は当地方に特有な平地林(山林)のなかに位置し、遺跡進入路はジープで送り迎えをした細い小径で、調査区へは、車も入れない農道で、機材、測量機器はじめ、全て手に持って入らなければならない状態であった。

左の写真は、中学生が埴輪を発見した掘り痕を中心として、南に緩やかに傾斜する台地斜面にトレンチを設定し調査を開始した直後の写真で

ある。周辺は、調査前に市教育委員会によって下刈りにより清掃され、立木は切り倒されている。A地区の調査は、埴輪馬が検出された地点を中心とし、地形測量と台地斜面にかけてのボーリング棒による地層(焼土)の確認探査から始めた。そして、ボーリング探査で焼土の分布を確認し、東西にトレンチを設定し、整然と並んだ状態で9基の埴輪窯跡の検出となった。

筆者は本格的な埋蔵文化財の調査は初めてであり、当初は明大生の後ろにいてスコップの泥を落とす作業であったが、時が経過すると慣れてきて、何よりも調査の初歩を教えて頂けることが楽しかった。また、切り株に遭遇すれば、農家育ちの馬力でお手伝いできたことも楽しい作業であった。休憩時間は大塚・小林三郎・熊野正也、また本県出身の阿久津久から懇切丁寧な指導をいただけたことは実に充実した日々であった。さらに作業終了後は、宿舎に呼んでいただき、諸星政得・川崎純徳と共に勉強会に参加でき、遺構・遺物の説明を受けられた時間は何事にも代えられない青春の思い出である。

A地点の全容が確認された時点で、明治大学考古学研究室と市との契約者でもあった杉原荘介が現地を訪れ、市教委に対し、調査結果報告を行っている。また、当日は、多数の見学者や報道関係者のほか、茨城考古学会員など考古学関係者なども来跡し、調査によって検出した遺構等の説明も実施された。さらに、報道関係者は、毎日のように現地の調査内容の取材を行い、新たな遺構の発見や新事実の説明によって新聞紙上に掲載したのである。

この日の午後、調査団は、弥生時代の研究の第一人者である杉原荘介を東中根遺跡に案内している。麦畑のなかの土器片の散布地を案内した大塚初重・川崎純徳らは遺跡の重要性を説明したが、先頭に立って案内できるとは考えもつかなかった。

後日、東中根遺跡は、勝田市史編さん事業のなかで、3次にわたる発掘調査を実施し、茨城県弥生時代後期遺跡の標識遺跡となる東中根式土器の良好なセットを確認して、また茨城県内最古の炭化米など多くの成果をなした遺跡となる。さらに遺跡の地主である西野茂信は、市史編さん事業で調査にあたった学生の真摯な調査態度に感激され、自らが所有する虎塚古墳の調査に全面協力し、古墳の発掘調査を承諾している。

馬渡埴輪製作遺跡では、調査で発生したゴミを処分するためのゴミ穴を掘ったところ、埴輪窯跡以外の新たな遺構が確認され、さらに遺跡の範囲が拡大することも判明し、1次調査は終了したものである。

馬渡埴輪製作遺跡の調査は、今から60年も前のことであるが、この古代遺跡の成果は、当時工業都市として発展していた勝田市にとって、新たな視点で歴史を見直す機運を生み出している。〔「工都に残る古代の陶芸村」『常陽芸文』常陽芸文センター 1986・5ほか〕

勝田市史編さん事業は、1971(昭和46)年から開始されるが、その萌芽は、この馬渡埴輪製作遺跡の徹底した調査と、勝田市・市教委・地域の人々との信頼関係にあったのである。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと(第3回) 鴨志田篤二 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む(第21回) 山本暉久 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第253回) 鈴木一有 …3
■考古学者の書棚「埴輪づくりの実験考古学」 齋藤直樹 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第21回)

山本 暉久

21. 神奈川県職員としての考古学 その5

神奈川県立埋蔵文化財センターの設立とその前後

前回触れたように、秦野市草山遺跡の調査と整理報告書作成作業を担当したあと、1976(昭和51)年4月から約1年間、1973(昭和48)年12月～1975(昭和50)年にかけて実施された相模原市当麻遺跡の報告書作成作業の一員に加わった。この遺跡は一般国道129号線改良工事に伴い、白石浩之(愛知学院大学)さんが中心となって調査が行われた遺跡で、とくに第3地点とした調査地区から大規模な縄文中期環状集落址が検出され注目された。その中期環状集落址の報告の一部を分担する役割が与えられたのだが、調査には参加していないため、竪穴住居址など発見遺構の調査経緯の詳細は知らないことから事実記載の報告に苦慮した。やはり自らがその遺跡の調査に関わっていないと、遺物はともかく発見遺構の報告は難しいというのが実感であった。続いて翌1977(昭和52)年から1978(昭和53)年の約2年間、海老名市上浜田遺跡の報告書作成作業の一員に加わった。国平健三さん(神奈川県立歴史博物館)が中心となって調査した遺跡で、このことは第17回で、玦状耳飾が土坑から対となって出土したことを中心に触れたが、遺跡の主体は古代の集落址で、その整理作業の大半は、出土した多量の古代の土師器・須恵器を実測する作業であった。なにせ、これまで、この時期の遺物に関する知識は乏しく、一から国平健三さんに教を請いながら実測作業する毎日であった。土師器甕形土器のナデやヘラ削り痕・刷毛目痕、環形のヘラ削り整形、須恵器杯・蓋などの回転糸切り痕などの実測作業という毎日が勉強であった。実際に遺物に触れて作図する作業という経験が大切なことを実感することとなった。余談だが、この遺物整理で感心したのは、国平健三さんのトレースした版下の作成方法であった。普通は実測した遺物を個別にトレースして、それを貼り込んで版下を作成するのであるが、氏は、縮尺して貼り込んだ実測原図に、直接トレペーをかけて一気にトレースして版下を完成するのである。つまり、トレースの失敗はしないという高等テクニックであり、その技術の卓抜さに驚嘆した。これは、ほかの人はあまり真似できないやり方であった。この上浜田遺跡や厚木市鷲尾遺跡の古代集落の整理・報告書作成作業を通して、相模原の古代土器編年が確立していくこととなった。

ところで、こうした遺物整理作業は横浜市南区中村町3丁目にあった旧・神奈川県中央衛生試験所のRC3階建ての建物(1927年建設)を文化財保護課の遺物整理室として利用したもので、当時すでに建物は老朽化著しく、天井に塗られた漆喰が各所で剥がれ落ちていたり、暖房は大形石油ストーブのみで、夏は冷房もなく扇風機が頼りという劣悪な環境であった。この建物は今もそのまま修復されることなく、大岡川の分流である中村川に架かる「浦舟水道橋」に面するように建っている。当時の中村川は汚水垂れ流しのドブ川で、メタンガスがぶくぶくと湧いているありさまであった。この風景は、黒沢明監督の「天国と地獄」(1963年公開)で描かれた誘拐犯が住んでいたスラム周辺を彷彿とさせるものであった。

1978(昭和53)年5月には、恩師櫻井清彦先生の推薦を受け

て、日本考古学協会員となった。大学で考古学を学び始めて13年後、ようやく考古学研究者として認められることとなった。1979(昭和54)年に入ると、4月～12月にかけて、横浜市緑区東本郷町の東耕地遺跡の調査に参加した。県立みどり養護学校(現・みどり支援学校)建設に伴う調査であった。南北に細長い丘陵性の地形であり、ここから10世紀中頃から後半と思われるコの字状に配置された大形掘立柱建物址群(写真参照)とそれに付随する住居址群が検出された。この掘立柱建物址群は、柱穴の堀方も方形で大きく、主体となる建物址もなんだか建て替えがなされ、緑釉陶器などの出土から特殊な建物址群であることが想定された。有力豪族の居館址や官衙・郡衙などに相当する公共的な施設とも考えられた。ただ、残念なことに、柱穴堀方を半截したさい出土した多量の遺物をそれぞれの堀方内に土嚢袋に入れて置いていたところ、その一部が盗難に遭ってしまった。まさか盗まれるとは思っておらずショックは大きかった。犯人を見つけるすべもなく、あきらめざるをえなかった。



▲横浜市東耕地遺跡掘立柱建物址群 「東耕地遺跡」1986より転載

1980(昭和55)年に入り、本庁勤務となり、埋蔵文化財の行政事務に携わるとともに、神奈川県立埋蔵文化財センター建設準備の一員に加わるることとなった。そのころ増加の一途をたどる公共事業に対応する発掘調査(記録保存)に文化財保護課が直営で調査することは人員的にも対応が困難となってきたことから、独立した調査機関を県に設置する方針が定まり、国の補助金を活用して建設することとなったのである。このころ、全国の地方自治体では、埋蔵文化財センターの設置が進んでいた時期でもあった。前述した旧・神奈川県中央衛生試験所のRC3階建ての建物の背後にある木造の施設を解体し、ここに建設することとなり、1982(昭和57)年4月、神奈川県立埋蔵文化財センターとして開設された。発足にあたり新規に埋蔵文化財センター職員を採用し、管理課と調査課の2課体制で運営されることとなった。これが今の神奈川県教育局生涯学習部文化遺産課が所管する「神奈川県埋蔵文化財センター」の始まりである。

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英之記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 253

蜆塚遺跡 ～静岡県浜松市

鈴木 一有

浜松市民にとって蜆塚遺跡は特別な遺跡である。縄文時代後期の集落遺跡で国指定史跡。馬蹄形貝塚(後期)の最大幅は100m程度。東海地方でこれだけの規模で貝塚を伴う集落全体が残っているのは稀有な事例である。遺跡は浜松駅から3kmほどの好立地、住宅街に囲まれ、佐鳴湖と呼ばれる内水域にも近い。浜松市博物館が隣接することもあり、毎年、多くの地元小学生が校外学習で訪れる。浜松の歴史年表の始まりには必ずと言っていいほど蜆塚遺跡が登場し、復元建物が木々に囲まれる姿が多くの市民の目に焼き付いている。

ところがである。浜松市の文化財担当者が蜆塚遺跡の特徴をどれだけ語れるのか、甚だ心もとない。遺跡は1955年から1958年にかけて調査され(浜松市1962)、1959年に国の史跡に指定された。今から70年ほど前のことである。その後、範囲確認の追加調査が1982年に実施されているが、この調査とて既に40年が過ぎ、蜆塚遺跡の発掘調査の経験は、最古参となった筆者を含め市の職員は長らく、誰も持ち合わせていない状況であった。

蜆塚遺跡の評価や価値づけは、浜松市文化財職員の第一世代であった向坂鋼二(1933～2022)の研究によるところが大きい。向坂は1950年代の蜆塚遺跡の発掘調査に携わり、報告書の編集や執筆を担当しただけでなく、その後も数々の論文や『浜松市史』及び『静岡県史』等の執筆を通じてこの遺跡の意義を分かりやすく説いた。中でも1970年に発表された「原始時代郷土の生活圏」は、蜆塚遺跡の調査事例と周辺遺跡の消長をもとに、半径3km程度の遺跡群を抽出し、生活領域や通婚圏との関連を指摘した古典的高論として知られている(向坂1970)。向坂の存在が偉大すぎた。近年に至るまで、蜆塚遺跡に関わる研究は1950年代の調査成果を基礎としており、遺跡と遺物を熟知している向坂の業績に依拠することが多かったのである。

蜆塚遺跡の整備は、1950年代の発掘調査と並行して進み、国の史跡指定に先立ち1957年には復元建物が建てられ、1958年には貝塚の断面を薬剤で硬化させて露出展示する貝塚断面保存施設が整えられた。これは、加曾利貝塚での貝塚断面展示に先立つもので、本格的な貝塚断面露出展示としては国内最古といわれている。その後、都市計画公園「蜆塚公園」としての整備(ただし都市公園としては未開設)が1977年～1982年に実施され、遺跡公園として現在の姿が形作られた。浜松市博物館が現在の地

で開館したのは1979年であり、この時期の整備からも45年が経過している。蜆塚の遺跡公園は、所与のものとなって久しい。

この間、遺跡の発掘調査は日本列島各地で進められ、縄文時代の研究は飛躍的に深められた。遺物や個別遺構の研究とともに、貝塚を伴う集落に関わる広域調査や環状盛土遺構の構造認識、水場遺構の調査事例の増加など、縄文集落を広い視野で捉える視点が各地の調査成果から提示されている。縄文時代の植物管理に関わる議論についても、各地で議論が繰り返されている。蜆塚遺跡においても後期の鹿角斧から晩期の打製石斧への移行が知られているものの、現代の研究水準で議論されることは殆どない状況であった。蜆塚遺跡で確認された建物は平地式と認識されている。ただし、その詳細な構造認識や上屋の復元的検討もなされていない。こうした課題認識から、浜松市では蜆塚遺跡の調査研究、再整備事業を企画した。奇しくも向坂が他界した2022年3月に蜆塚遺跡の保存活用計画(浜松市2022)を刊行し、浜松市は再調査、再整備事業に着手した。手始めに、2022年度～2026年度を第1期と捉え、基礎的な調査研究とともに、縄文時代的な景観を阻害する現代的植栽や建物といった構造物の撤去、及び園路や看板の整備事業を計画した。

調査研究に関しては、1950年代の発掘調査成果の再検討を急務として捉えている。動物遺存体や土器底部における編組圧痕の調査など、とくに検討が立ち遅れている分野の検討を2024年度からはじめた。今まで手付かずだったこともあり、その成果は目を見張るものがある。その一端は、速報的に報道公開し、浜松市博物館における速報展示で広く、伝えている。過去の調査を含めた蜆塚遺跡の総合的検討については、微地形測量や過去に検出した遺構の合成作業が急務であった。測量精度に課題があった1950年代の調査成果を取り急ぎ統合し、同時に造成事業で失われた周辺地形を合成して、地形の特徴を取り込んだ遺跡全体図を作成した(挿図)。この作業により、馬蹄形に分布する3か所の貝塚と建物跡、土坑墓の関係が明確になったほか、微地形測量によりすり鉢状に窪む広場の特徴が掴めるようになり、南側の谷部に向かって開かれている蜆塚集落の特徴も示せるようになった。新たに作成した遺跡全体図をみると、浜松市博物館が建つ遺跡南側の谷部こそ、水場であろうことも容易に予想できる。

水場の探求は、新たな発掘調査によっても進められている。2024年に実施した第8次調査では、南側の谷部に初めてトレンチを設定し、縄文時代の遺物包含層を確認した。水場遺構そのものは未確認ながら、先の想定を首肯させる成果が得られている。2024年以降、蜆塚遺跡で実施している発掘調査は、地元出身者を中心とした考古学専攻大学生に参加してもらうよう、働きかけられている。蜆塚遺跡は縄文時代のみならず、考古学を志す多くの学生が集う場所として、また浜松市博物館も多くの市民を遺跡と繋ぐ場として機能することが期待されている。蜆塚遺跡が、多くの方のフェイバレット・サイトになるべく、日々、調査研究を続けている。

参考文献：

浜松市教育委員会1962『蜆塚遺跡 総括編』
向坂鋼二1970『原始時代郷土の生活圏』『郷土史講座1 郷土史研究と考古学』朝倉書店
浜松市2022『史跡蜆塚遺跡保存活用計画』

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは藤村翔さんです。



▲蜆塚遺跡の全体図

考古学者の書棚

「埴輪づくりの実験考古学」

大学合同考古学シンポジウム実行委員会 編／学生社(2006)

齋藤 直樹

はじめに

円筒埴輪の分析において、製作技法や形態の特徴、刷毛目工具などをもとに「工人」や「同工品」の抽出がおこわれるようになって久しい。下総型埴輪での一連の分析によりその研究方法や成果が早くに示され、近年では生出土遺跡および埼玉古墳群出土資料を核とする「刷毛目共通類型」データベースにより広域での比較検討が可能となるなど、その成果は広く知られるところとなっている。

今回紹介する書籍は、2006年刊行の『埴輪づくりの実験考古学』である。刊行からはや20年弱が経過しており、その内容もすでに多くの方の知るところとなっていると思われるが、ご寛恕願いたい。

本書の内容

書名が端的に示すように、本書は第3回の大学合同考古学シンポジウムとしておこなわれた埴輪製作実験とそのシンポジウムの報告である。学生から教員まで総数70名超によっておこなわれた製作実験の報告やシンポジウムの基調講演・報告等から構成されており、約250頁にわたり埴輪製作実験にかんする内容で占められている。

本書の主題である製作実験は、基調報告という形で若狭徹氏により詳細がまとめられているため、そちらをご参照願いたい。概要を述べるため、本実験の2つの特徴を挙げることにしたい。ひとつは製作者だけで60人超という実験参加者の多さである。ひとりの参加者が短期間に10本弱を製作するという集中かつ専門的な製作実験であり、より古墳時代当時の実態に迫るものであるといえよう。もうひとつの特徴は、現在も第一線で活躍する多くの埴輪研究者らの協議のもと、実際の埴輪から想定しうる埴輪生産の諸段階が再現された前提条件によりおこなわれたことである。2条3段の普通円筒埴輪を模倣対象として、埴輪製作遺跡での生産体制を想定したA班(熟練者のみ)3グループ、埴輪の需要段階を想定したB班(熟練者+初心者)7グループ、実物観察のみに基づくC班(初心者のみ)2グループ、間接的な情報のみでの製作を想定したD班(初心者のみ)1グループと、段階を分けた複数グループが設定されたほか、これらの基本条件に加え粘土への混入砂比率の変更による製作難度の把握や一個体内での複数製作者による分業などの異なる課題が付与され実験がおこなわれた。高い目的意識のもとで進められた大規模な製作実験であり、「埴輪生産」を考えるうえでこの実験成果が極めて重要な位置にあることは言を俟たない。筆者のような浅学の身ではその成果を存分に引き出すことはできないが、いくつかの興味深い成果を挙げてみたい。A～C班の各グループの実験報告からは、1本目の製作には3時間超、長いもので8時間を超えるほどの製作時間を要していたものが、2本、3本と作業を重ねるうちに製作時間が劇的に短縮され、最終的に2時間台のなかに収斂していくことがうかがえる。また、実測図を見る限りでは、これと比例するように製作品の

プロポーションも安定していく様子が見てとれる。これらの結果を踏まえるならば、乾燥工程を必要としない小規模な円筒埴輪の製作においては、安定的な製作をおこなう一定の所要時間(2条3段では2時間前後)があり、また製作技術の習熟には(少なくとも本実験参加者においては)それほどの期間を要しないとも考えられよう。また、伝聞情報をもとに製作をおこなったD班の実験1では、「筒形の土製品」、「粘土紐が2本巡る」といった基本情報のみが与えられたうえで製作をおこなったが、全体をナデ調整のみで仕上げる個体や筒型器台のような形状を呈す個体など、製作者ごとに異なるものがつくられる結果となった。まったく同列に扱うことはできないものの、これらのような“一般的”な円筒埴輪とは異なる資料が実際に古墳から出土することもあり、1,500年の時間差を経ても人間の発想に大きな変化が認められないこともまた、面白い成果だろう。

この製作実験はこれで終わりではない。最後の分析として、製作実験により作られた350点のうち無作為に抽出された84点を相手に、対象とする時代も器物も異なる3名の研究者を招聘したうえで同工品識別を実施してもらったのである。8つの属性による分類、大きさ>突帯貼付位置>器形の3階層による分類、法量・形態・製作技法などの組み合わせによる分類と、同じ資料を対象にしながらも各研究者で全く異なる分析手法が採られたものの、それぞれが高い精度で個別の製作者を抽出し得る結果となった。突帯の形状や器面調整などは下総型埴輪などの分析においても使用される属性であり、属人性が高い属性と換言できるのかもしれない。

おわりに

製作実験の内容やその後の同工品識別ブライントテストに紙幅を割いてきたが、冒頭で述べたように本書にはシンポジウムの基調講演が2本・基調報告が4本掲載されている。若狭氏による製作実験に関するもののほか、基調報告では現在も埴輪研究をリードする犬木努氏「埴輪同工品論の論理と方法」、太田博之氏「埴輪研究における『型』と『系』」、日高慎氏「『型』成立の実体」と、いずれも関東地方において埴輪の研究を行ううえでは必読の論考が掲載されている点も、本書の重要性を高める要素のひとつである。討論では東北地方や韓半島などの実資料との比較も言及されており、いかに本実験が実資料へ反映可能な内容であったかを示している。円筒埴輪の分析において同工品分析が一般的となった現在において、対象資料と製作者(工人)との間隙を埋めるためにも、あらためて本書をお薦めしたい。

アルカ通信 No.261

発行日 2025年6月1日
企画 角張淳一(故人)
発行 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL: 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL: http://www.aruka.co.jp